

## 共生のプロセスとしての助産ケア

立命館大学応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
人間形成・臨床教育クラスター

出産・誕生をめぐる状況は、第2次世界大戦以降、この50年の間に大きく変化してきた。出産の場が家庭から施設へ移行したことで、出産・誕生は医療モデルのもとで見られる、医療によって管理されるものになってきた。このような状況で、女性たちは子どもを産む時、その「出産観」(その多くは支配的文化によって規定される)によって、出産の場所や方法を決めている。第1章では、このようなテーマをとりあげた。

それでは、助産婦はどのような「出産観」をもって、出産に携わっているのだろうか。かつての助産婦たちは、どのような「出産観」をもっていたのであろうか。また助産院や自宅で出産を経験した人たちは、どのような経緯をへて、そのような選択をし、それが現在の生き方とどのようにつながっているのだろうか。これらのことを明らかにするために、本考察では、90歳になる元助産婦の聞き取り調査を行い、あわせて私自身の体験をとおして助産婦のもつ「出産観」を探ってみた。これが第2章であつかったことである。

第3章では、助産院や自宅で出産をした2つの事例をとりあげた。助産院で出産をした人が産後3ヶ月の時点で生まれた子どもに宛てて書いた手紙と、自宅で出産をしたカップルに対する聞き取り調査をもとに、それぞれの出産体験について考察してみた。それによって、このような出産を選択する人たちの抱いている「出産観」を具体的に例証しようとした。このような人たちの場合、いのちや自分自身のからだにじっくりと向き合うことが、出産場所や方法についての決断をするうえで重要なプロセスになっていた。そのようなプロセスをへて体験した出産・誕生は、当事者に変容をもたらすものであった。

第4章では、周産期心理学の知見をもとに、これからの出産・誕生に向けて、どのような助産ケアが望ましいのかを、いくつかの提案とともに提示した。

助産婦が抱く「出産観」とは、産むことも、生まれることも自然な営みだということである。「自然に産む・生まれる」ということは、人間の生命記憶に根ざしたものである。また助産婦は、母親と子どもという二つのいのちに寄り添いながら、助産ケアを提供していく。そのなかで助産婦のなかに「慈しみ」の念が湧き起こり、いのちへの「親和性」が育まれる。これが助産婦の活動の源となるものである。